

ケンタウロスとヤドカリ

Centaur and Pagurian

Takayuki FUNATSU

Professpr, University of Kyusyu
Adviser, IATSS

船津孝行

九州大学文学部教授
本学会顧問

しばしば交通問題を論じるときに、事態を人-車-環境に区分し、それらの3要素が三角形の頂点に配置して示されている。詳細研究と称する最近の幾つかの研究は、人-車-環境のトライ・アングルとか、トライ・レベルといった事故原因の分類を用いて、事故を論じている。ここには、事故を担っている単位は存在してはいない。そのような分類は、一見したところいかにももっともらしいが、正しく事態を捉えているものではない。(人-車系)-環境というのが交通事態のより正しい表現である。人-車系が事故を担っている単位であると同時に、環境とともに事故の原因となっているのである。

この間違っ事故へのアプローチは、“事故の疫学モデル”にしたがったものである。その見解の、影響力の大きなスポークスマンであった、ハーバード大学のMcFarland & Moseleyは、《ハイウェイの輸送安全における人間要因》(1968)のなかで、“事故は疫病の過程を支配していると同じ生物学的な過程にしたがう……事故をコントロールしようとする試みは、作因agent、宿主host、環境、すなわち車、ドライバー、ハイウェイの相互作用について考察しなければならない……”と述べている。ある疫病には3つの要因が介入している：宿主あるいは感染した人；病原菌；感染源、たとえば水、食物がそれである。道路交通において、ドライバーは宿主、車は細菌、道路上の事態は感染源というわけである。

イギリスのJ. コーエンは、《交通事故の原因と予防》(1968)のなかで、“これは、一方においてドライバーと車、他方において個体と病原菌の間の、非常に根拠の薄弱な類諭でしかない。たとえばビールスが有機体内に繁殖するように、車はドライバーが気付かぬうちに侵入してくる異物ではない。またわれわれは、バクテリアを全滅させるように、車を一掃しようと試みているわけでもない……ただ僅かに死傷者の数に関してのみ、事故は疫病に類した特性をもっていると言えるにすぎない……”と疫学モデルを批判している。

このアプローチによって生じた不幸な結果の一つは、“その事態を任意に、(a)ドライバー、(b)車、(c)交通環境に関連した諸側面へと切り刻み、そのメカニズムやダイナミックスに関心を示さないことである……このような分割は、われわれが理解しなければならないドライバー-車-交通環境の統一性を破壊するように思われる。解明されなければならないことは、多少とも活性をもたない静的な成分ではなく、それらの変数の相互作用の問題である……”。

その後、コーエンは、人-車系をギリシア神話にでてくるケンタウロス、上半身は人で、下半身は馬という半人半獣の怪物にたとえている。事故は、腰から上の人でも、下半身の馬でもなく、ちょうど16世紀に、スペインの騎馬兵を初めて見たアメリカのインディアンが思ったように、人馬一体の生き物が起こしているというわけである。その限りにおいて、彼は間違っていない。しかし彼は、人-車系というタスク・システムの統合的な特性を強調するあまり、少しばかり行き過ぎたようである。われわれは、人-車系をヤドカリにたとえている。ケンタウロスほどの威厳はないし、馬ほどのスピード感はないが、殻(車)を被ったヤドカリ(ドライバー)の方が、より適切な類諭であると考えられるが、いかがなものだろうか。

原稿受理 昭和61年6月20日